

東松島市宮戸島地区の復興まちづくり計画の提案

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科

王 瀟

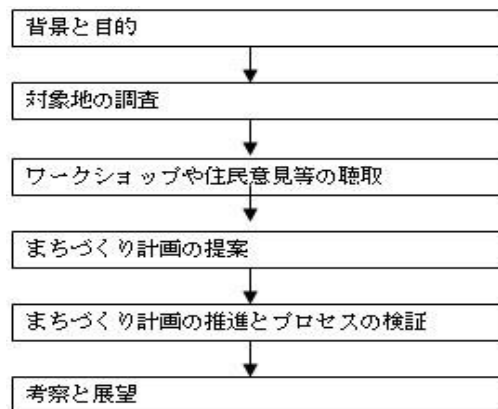
1. 背景および目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は多大な被害をもたらした。復興は進みつつあるが、被災後3年近くを経ても、仮設住宅には多くの住民が居住している。対象地は東松島市宮戸島地区で、兵庫県立大学の緑環境景観マネジメント研究科の教員や学生が花と緑を活用した復興支援活動やまちづくりに携わってきた。

本論では支援活動と共に住民意見を取りまとめたり、それらを反映したまちづくり計画を提案したりしている。将来のまちづくりの参考になることを目的として、行政や専門家と協議や連携して進めていること等を検証した。

2. 研究方法

研究の流れを以下の図で示す（図-1）。



「図-1」 研究のフロー

宮戸島の被害の大きかった月浜地区、大浜地区、室浜地区で花緑を活用したプログラムを提供しながら対象地の調査を行った。また、ワークショップや地域住民の意見聴取に努めた。その上で、計画の提案を行い行政や専門家との調整というプロセスを繰り返して、まちづくり計画の推進とプロセスを検証した。

3. 結果

3.1 対象地の調査

3.1.1 対象地の概要

対象地の松島市の宮戸地区は月浜、里浜、大浜、室浜図-2から構成される国の特別名勝である。人口は震災前の1000人から約650人まで減少している。漁業や農業と民宿を行っていた地域である。波が民宿街を直撃したが里浜地区の被害は軽微である。復興の状況としては、高台移転や跡地利用の計画と実施が進みつつある。

3.1.2 被害状況

図-3 に示すように対象地の民宿街は里浜以外、ほとんどなくなり、地面が陥没したり、道路も消失しているところが多い。更地となった漁村集落を将来どのように活用するかが大きな課題となっている。



図-2 4つの浜の位置

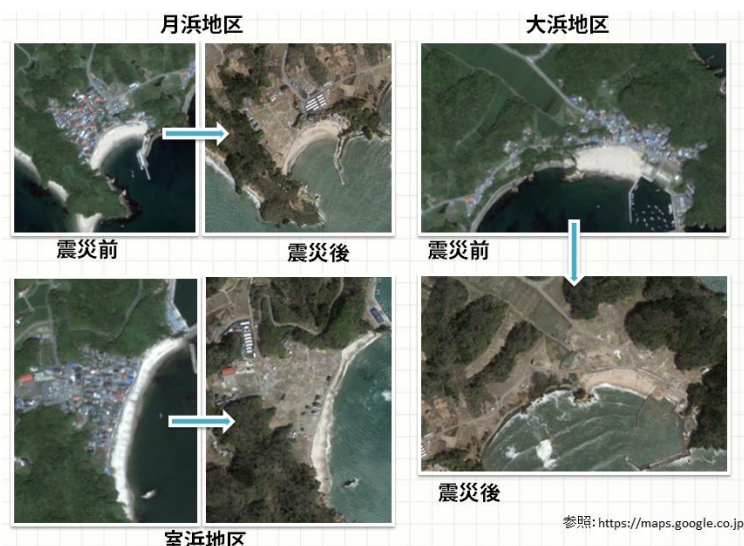


図-3 被害状況

3.1.3 土壌調査

2013年12月に行った、月浜地区の海浜部は陥没しており、土盛りが必要である。塩分の多い構成で、植栽には、新たな土壌改良も求められる。

	試料A	試料B	平均
pH (酸度)	8.28	7.96	8.12
EC (電気伝導度) [S/m]	1.7	2.2	1.95

月浜民宿跡地の土壌の化学性

3.1.4 上位計画

土地利用に関して、宮戸島地区では、3浜で高台移転と跡地利用が構想されている。森林地域が住宅地として転用された。防災集団移転促進事業や、災害公営住宅整備事業などが復興整備事業として計画されている。

3.1.5 植生調査

宮戸島周辺の植生に関して、旧の町史を参考に自生種をリストアップした。

3.2 ワークショップや住民意見等の聴取

本報告では、地域住民の意見聴取を様々な形で行っている。それらは、テーマを設定して、グループ形式で協議するワークショップであったり、茶話会の形式で、意見聴取を行ったり

するものである。2011年5月から、継続して行なわれており、その経過を以下に示す(表-1)。

表-1 ワークショップや住民意見の聴取

日時	内容	参加者	王 潘
2011. 3	東日本大震災が発生		
2011. 5-20 12. 3	現地調査(宮城県内全域)	兵庫県立大学 チーム(教員・学生)	
2012. 5-9	宮戸市花と緑を活用した ボランティア活動+ 復興まちづくり支援活動 (WSなど)	同	復興まちづくりの計画に参加
2012. 12	同	同	コミュニティ推進協議会に参加
2013. 2-3	同	同	復興まちづくりの計画作成を継続
2013. 6	同	同	上と同じ+WSに参画
2013. 11	同	同	上と同じ+WSに参画

3.3 宮戸島の復興まちづくり計画

3.3.1 宮戸島全体のランドデザイン

国の特別名勝でもある4つの浜の特性を生かし、観光、自然、漁業、そして歴史文化を保全育成する地域づくりを推進する。

3.3.2 月浜地区の跡地利用計画

月浜地区は、もともと民宿が多く観光への意識が高い集落である。この計画では、花壇や草木園の他に、レストランやバーベキューができる施設、漁業体験施設なども提案している(図-4)。住民の記憶や意見に基づくデザインを検討して、震災を記念する空間をデザインした。パースはシュロの並木や自然草木園の提案である。

3.3.3 大浜地区の跡地利用計画

大浜は豊かな自然を活かした新たな交流拠点となる集落である。広大な自然の緑地がある。「自然の家」が誘致されることも決定している。田畑だったところも広く公園や緑地など自然体験をする空間がたくさんある。ビオトープやフィールドアスレチックなどを提案した(図-5)。

3.3.4 室浜地区の跡地利用計画

室浜は漁業が活発なところで、既にいくつかの漁業施設が建設されて、再開している。集落の結束が固く、漁業中心のまちづくりが進められている。地域の女性たちは、花壇や憩える場を求めており、緑地の中にそれらを計画した(図-6)。他にも津波の高さを表示する記念となるものが希望されており、広場や記念碑を提案している。

3.4 高台移転地の緑地計画

健康の増進と世代間の交流のために対応した公園(図-7)。散歩道や休憩場所としての東屋もある。花壇の設置も計画しているが、維持管理の負担は少なくする。幅を広く確保した芝生広場はイベントや祭りに利用できる。



図-4 月浜地区跡地利用



図-5 大浜地区跡地利用



図-6 室浜地区跡地利用



図-7 3浜の高台移転地の緑地計画（上から、月浜、大浜、室浜）

活動の写真



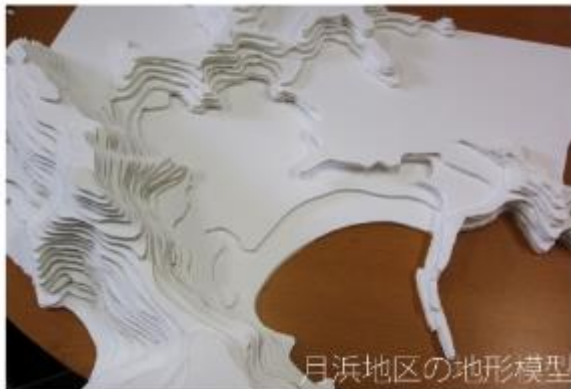
コミュニティ推進協議会



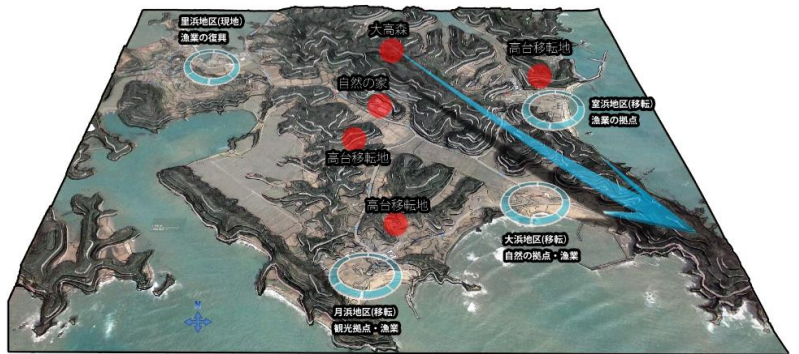
ワークショップのまとめ



作った模型



日浜地区の地形模型



3.5 津波防災マップ

宮戸島全体について、震災後の状況を反映した散策路や避難マップ及び、侵水域を作成した（図-8）。

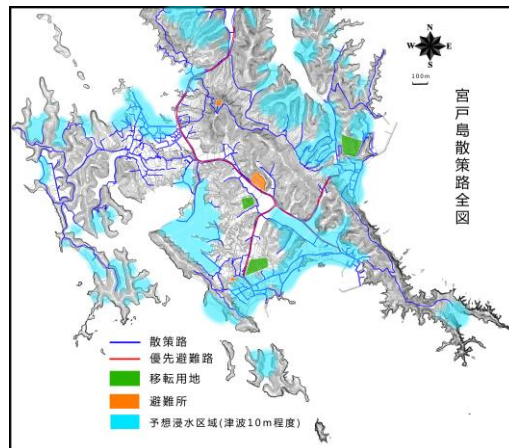


図-8

3.6 まちづくり計画の推進とプロセスの検証

復興まちづくりの提案作成に至るきっかけは、花や緑を活用したプログラムなどであった。その結果、復興まちづくりなどのワークショップや話し合いもスムーズに進めることができた。緑地や公園などの計画は本来、地域の人々が共通して、将来への展望や夢を語る場所となるべきであり、その実現への期待は高いものである。緑化に関して言えば、宮戸島の自生種を用いた緑化が特に自然樹林帯や自然草木園では重要である。

ワークショップなどでは、女性の参加が多かったが、男女共同参画の推進が望まれる。まちなみや植栽に対しても過去の記憶をほりおこす貴重な意見も数多くみられることからこのような意見を活用することは重要である。

4. 考察と展望

これまでの活動を踏まえて、以下の考察が得られた。

- i. 予防的な防災まちづくりが必要で、地震や津波の襲来への備えが後のまちづくりを左右することが理解された。
- ii. 予算、事業計画が必要なこと。跡地利用も緑地計画の予算が付きにくい状況が続いている。行政や住民は多方面で予算獲得に働くべきではないだろうか。
- iii. 住民、行政、専門家との協議や連携が必要なこと。東日本では、膨大な労力と経済力が必要なため、きめ細やかな住民主体による計画形成手法が不足している。今後はこれらの課題に取り組まなければならないだろう。

神戸市における、災害時の復興まちづくりに対しては、次のような考察が述べられる。

- i. 1995年の阪神・淡路大震災の経験と復興まちづくりを全国に発信する必要がある。
- ii. 災害発生時の津波の浸水範囲など正確な予測と周知が必要である。
- iii. 地震や津波などが発生した場合の地形等の壊変も予測することが重要である。
- iv. 平常時からの地域内の交流やコミュニケーションが災害時の話し合いの基盤となる。
- v. 平常時から、公園や緑地に対する地域の関わりを深めることが大切。